



Level 10

2015年度
第 **2** 回



検定開始の合図があるまで問題を開いてはいけません。
まず、下記の注意をよく読んでください。

□ 検定上の注意 □

1. 検定時間は90分です。
2. 検定開始前に答案用紙に受検番号・氏名・生年月日を必ず記入してください。
3. 検定が始まって、印刷が見えにくかったり、ページがおかしかったりしたら、手をあげて監督者に知らせてください。
4. 問題のあいているところは自由に利用してください。
5. 問題は、答案用紙と一緒に回収します。

受検番号

氏名

《問題Ⅰ》 次の問いに答えなさい。

第一問

後の問題文には(1)～(5)のような論理的に誤った箇所があります。それぞれ(1)～(5)に該当する誤った箇所の行数を答え、間違いを抜き出し、正しい形に直しなさい。(1)は、語句を付け加えて正しい形に直しなさい。

- (1) 主語と述語が対応していない。
- (2) 指示語の使い方がおかしい。
- (3) 助詞・助動詞の使い方が間違っている。
- (4) 接続語が間違っている。
- (5) 読点の打ち方が間違っている。

第二問

A～Dの順序を並べ変えて要旨を明確にした文章にしなさい。

【問題文】

A 生徒たちは学校生活の折々に校歌を繰り返し歌うことによって、このような歌詞の内容は心に深く刻んでいく。学校の理想や教育方針を知らず知らずのうちに記憶し、校風を身につけていくだけでなく、地域の山河の名前や歴史も、メロディーに乗せて歌っているうちに自然に記憶する。また、大勢で校歌を歌って一体感を感じることで、学校や地域への帰属意識も高まっていくに違いない。

B 校歌に歌われているのは校風に決まっている、と思うかもしれない。もちろん、歌詞には学校の特徴や理想、教育方針が詠み込まれているが、それだけではない。もっと具体的な、地元の山や川の名前が取り上げられていないだろうか。地理的な環境は、校歌にもっともよく詠まれる内容なのである。山や川の名前のほかにその山から、吹き下ろす風など、地域独特の自然感情も校歌にはよく詠まれている。このような地理的、自然的環境と関連づけて歌われることが多いのだ。つまり山に厳しさやたくましさを、川に優しさや清らかさを象徴させ、生徒がそのような人間に育つようにと願う内容の歌詞になっているのである。

C 現役の小中学生・中学生では、自分の通っている学校の校歌を何も見なくても歌える者が大半を占めるだろう。大人になっても、小学校や中学校の校歌を覚えているという人もいる。私たちはそれほど校歌に親しんでいたのである。では、その校歌にはどんな内容が歌われていたのか、思い起こしてみてもほしい。

D 地理や自然だけでなく、校歌には地域の特色である歴史や文化が歌われることも多い。城や橋などの有名な建造物、地域に大きな影響を与えた寺院などが歌詞には詠み込まれているのだ。ものだけではなく、この地域出身の偉人や、伝統産業が歌詞に取り上げられることもある。

《問題Ⅱ》 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

店に新しそうな肴さかなが沢山あった。梅は小鮪あじの色のいいのが一山あるのに目を付けて、値を聞いて見た。すると上さんが、「お前さんは見附けない女中さんだが、どこから買いにお出だいで」と云ったので、これこれの内から来たと話した。上さんは急にひどく不機嫌な顔をして、「おやそう、お前さんお気の毒だが帰ってね、そうお云い、（ A ）」と云って、それきり横を向いて、烟草を呑んで構い附けない。梅は余り悔やしいので、外の肴屋へ行く気もなくなって、駈けて帰った。そして主人の前で、気の毒そうに、肴屋の上さんの口上を、きれぎれに繰り返したのである。

お玉は聞いているうちに、顔の色が唇くちびるまで蒼あざくなった。そしてやや久しく黙っていた。世馴れぬ娘の胸の中で、込み入った種々の感情が chaosカオスをなして、自分でもその織り交ぜられた糸をほぐして見ることは出来ぬが、その感情の入り乱れたままの全体が、強い圧を売られた（ ① ）の処女の心の上に加えて、体じゅうの血を心の臓に流れ込ませ、顔は色を失い、背中には冷たい汗が出たのである。こんな時には、格別重大でない事が、最初に意識せられるものと見えて、お玉は（ B ）と先ず思った。

梅はじっと血色の亡くなった主人の顔を見ていて、主人がひどく困っていると云うことだけは暁さとったが、何に困っているのか分からない。つい腹が立って帰っては来たが、午ひるのお菜がまだないのに、このままにしているのは済まぬと云うことに気が付いた。さっき貰って出て行ったお足さえ、まだ帯の間に挿はさんだきりで出さずにいるのであった。「ほんと

にあんな厭いやなお上さんてありやしないわ。あんな内のお肴を誰が買って遣るものか。もっと先の、小さいお稻荷さんのある近所に、もう一軒ありますから、すぐに行行って買って来ましようね」慰めるようにお玉の顔を見て起ち上がる。お玉は梅が自分の身方になってくれた、(2)の嬉しさに動されて、(C)。梅はすぐばたばたと出て行った。

お玉は跡にそのまま動かずにいる。気の張はりが少し弛んで、次第に涌わいて来る涙が溢れそうになるので、袂たもとからハンカチーフを出して押えた。(D)。これがかの混沌とした物の發する声である。肴屋が売ってくれぬのが憎いとか、売ってくれぬような身の上だと知って悔やしいとか、悲しいとか云うのでないことは勿論であるが、身を任せることになっている末造が高利貸であったと分かって、その末造を憎むとか、そう云う男に身を任せているのが悔やしいとか、悲しいとか云うのでもない。お玉も高利貸は厭なもの、こわいもの、世間の人に嫌われるものとは、仄ほかに聞き知っているが、父親が質屋の金しか借りたことがなく、それも借りたい金高を番頭が(3)で貸してくれぬことがあっても、父親は只困ると云うだけで番頭を無理だと云って怨んだこともない位だから、子供が鬼がこわい、お廻りさんがこわいのと同じように、高利貸と云う、こわいものの存在を教えられていても、別に痛切な感じは持っていない。そんなら何が悔やしいのだろう。

「一体お玉の持っている悔やしいと云う(4)には、世を怨み人を恨む意味が甚だ薄い。強いて何物をか怨む意味があるとするなら、それは我身の運命を怨むのだとでも云おうか。それを苦痛として感ずる。悔やしいとはこの苦痛を

さすのである。自分が人に騙だまされて棄てられたと思つた時、お玉は始て悔やしいと云つた。それからたつたこの間妾めかけと云うものにならなくてはならぬ事になつた時、又悔やしいを繰り返した。今はそれが只妾と云うだけでなくて、人の嫌う高利貸の妾でさえあつたと知つて、きのうきよう「時間」の齒で咬かまれて角がつぶれ、「あきらめ」の水で洗われて色の褪さめた「悔やしき」が、再びはつきりした輪廓りんかく、強い色彩をして、お玉の心の目に現われた。お玉が胸に鬱結うっけつしている物の本体は、強いて（5）を立てて見れば先ずこんな物でもあろうか。

暫くするとお玉は起つて押入を開けて、象皮賽ぞうひまがの鞆から、自分で縫つた白金巾しろかなきんの前掛を出して腰に結んで、深い溜息ついで台所へ出た。同じ前掛でも、絹のはこの女の為に、一種の晴着になつていて、台所へ出る時には掛けぬことにしてある。かれは湯帷子ゆかたにさえ領垢えりあかの附くのを厭いとつて、鬢びんや髻たばの障る襟の所へ、手拭を折り掛けて置く位である。}

お玉はこの時もう余程落ち着いていた。（ E ）かれの精神はこの方角へなら、油をさした機関のように、滑かに働く習慣になつてゐる。

森鷗外「雁」

第一問 次の文章を「」にある元の場所に戻して、その直後の五字を抜き出なさい。

自分が何の悪い事もしていぬのに、余所よそから迫害を受けなくてはならぬようになる。

第二問 (1) (5) に入る言葉を、次のア～カの中から選り記号で答えなさい。

ア 刹那 イ 概念 ウ 無垢 エ 条理 オ 摂理 カ 因業

第三問 (A) (E) に入る文を、次のア～オの中から選り記号で答えなさい。

ア あきらめはこの女の最も多く経験している心的作用で

イ 反射的に微笑んで頷く

ウ こんな事があつては梅がもうこの内にはいられぬと云うだろうか

エ 胸の内には只悔やしい、悔やしいと云う叫びが聞える

オ この内には高利貸の妾なんぞに売る肴はないのだから

第四問 —— 線部①と同内容の箇所を十字以内で抜き出ささい。

第五問 —— 線部②の理由として考えられる箇所を十字以内で抜き出ささい。

《問題Ⅲ》 次の問いに答えなさい。

第一問 次の言葉を並べかえて一文を作るときに、不要な言葉があります。それぞれ二つずつ答えなさい。

- (1) 登場人物の して 描写は 小説の 動作は 投影 風景 描写を 心情を いる 。
- (2) 私は 過ぎた いくつもの 前を 電車が 私の どうも 通り 目の ゆっくりと 。

第二問 次の言葉を並べかえて、一文を作りなさい。

- (1) 不断の ある よる 国民の 主義は 努力に 民主 もので 。
- (2) 透明な 見た 朝 光が 込むのを 起きると 差し 。

第三問 次の言葉を並べかえて、一文を作りなさい。

- (1) す の 乾 君 意 は 見 味 る 無 ぎ 燥 。
- (2) 尾 対 た 頭 は 君 徹 徹 反 し 。

第四問 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

お伽噺とぎばなしを読むと、日本のなら「昔々」とか「今は昔」とか書いてある。西洋のなら「まだ動物が口を利いていた時に」とか「ベルトが糸を紡いでいた時に」とか書いてある。あれは何故であろう。どうして「今」ではいけないのであろう。それは本文ほんもんに出て来るあらゆる事件に或可能性を与える為の前置きにちがいない。何故かと云うと、お伽噺の中に出て来る事件は、いづれも不思議な事ばかりである。だからお伽噺の作者にとっては、どうも舞台を今にするのは具合が悪い。絶対に今ではならんと云う事はないが、それよりも昔の方が便利である。「昔々」と云えば既に太たい古緬邈こめんぼくの世だから、小指ほどの一寸法師が住んでいても、竹の中からお姫様が生れて来ても、格別矛盾の感じが起らない。そこで予め前へ「昔々」と食付けたのである。

所でもしこれが「昔々」の由来だとすれば、僕が昔から材料を採るのは大半この「昔々」と同じ必要から起っている。と云う意味は、今僕が或テエマを捉えてそれを小説に書くとする。そうしてそのテエマを芸術的に最も力強く表現する為には、或異常な事件が必要になるとする。その場合、その異常な事件なるものは、異常なだけそれだけ、今日この日本に起った事としては書きこなし悪いにく、もし強いて書けば、多くの場合不自然の感を読者に起させて、その結果折角のテエマまでも犬死をさせる事になってしまう。所でこの困難を除く手段には「今日この日本に起った事としては書きこなし悪い」と云う語ことばが示しているように、昔か（未来は稀であろう）日本以外の土地か或は昔日本以外の土地から起った事とするより外はない。僕の昔から材料を採った小説は大抵この必要に迫られて、不自然の障しょうがい碍を

避ける為に舞台を昔に求めたのである。

しかしお伽噺と違って小説は小説と云うものの要約上、どうも「昔々」だけ書いてすましていると云う訳には行かない。そこで略時代ほほの制限が出来て来る。従ってその時代の社会状態と云うようなものも、自然の感じを満足させる程度に於ておい幾分とり入れられる事になって来る。だから所謂歴史小説とはどんな意味に於ても「昔」の再現を目的エンドにしていないと云う点で区別を立てる事が出来るかも知れない。——まあざっとこんなものである。

芥川龍之介「澄江堂雜記」

(1) お伽噺が「昔々」で始まる理由を三十字以内で説明しなさい。(句読点を含む)

(2) 芥川龍之介の歴史小説が「昔」の再現を目的としたのではない理由を七十字以内で説明しなさい。(句読点を含む)

《問題Ⅳ》 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

「天は人の上に人を造らず人の下に人を造らず」と言えり。(a) 天より人を生ずるには、万人は万人みな同じ位にして、生まれながら(1) 上下の差別なく、万物の靈たる身と心との働きをもって天地の間にあるよろずの物を資り、もって衣食住の用を達し、自由自在、互いに人の妨げをなさずしておのおの安楽にこの世を渡らしめ給うの(2) なり。(b) 今、広くこの人間世界を見渡すに、かしこき人あり、おろかなる人あり、貧しきもあり、富めるもあり、貴人もあり、下人もありて、その有様雲と泥との相違あるに似たるはなんぞや。その次第はなはだ明らかなり。『実語教』に、「人学ばざれば智なし、智なき者は愚人なり」とあり。(c) 賢人と愚人との別は学ぶと学ばざるとによりてできるものなり。また世の中にむずかしき仕事もあり、やすき仕事もあり。そのむずかしき仕事をする者を身分重き人と名づけ、やすき仕事をする者を身分軽き人という。すべて心を用い、心配する仕事はむずかしくして、手足を用うる力役はやすし。ゆえに^① 医者、学者、政府の役人、または大なる商売をする町人、あまたの奉公人を召し使う大百姓などは、身分重くして貴き者と言うべし。

身分重くして貴ければおのずからその家も富んで、下々の者より見れば及ぶべからざるようなれども、その本を^{もと}尋ねればただその人に学問の力あるとなきとによりてその相違もできたるのみにて、天より定めたる約束にあらず。諺にい^{ことわざ}わく、「**X**」と。されば前にも言えるとおおり、人は生まれながらにして貴賤・貧富の別なし。ただ学問を勤めて物事をよく知る者は貴人となり富人となり、無学なる者は貧人となり下人となるなり。

[学問とは、ただむずかしき字を知り、解し難き古文を読み、和歌を楽しみ、詩を作るなど、世上に実のなき文学を

言うにあらず。これらの文学もおのずから人の心を悦ばしめずいぶん（3）なるものなれども、古来、世間の儒者・和学者などの申すよう、さまであがめ貴むべきものにあらず。これがため心ある町人・百姓は、その子の学問に出精するを見て、やがて身代を持ち崩すならんとて親心に心配する者あり。無理ならぬことなり。畢竟その学問の実に遠くして日用の間に合わぬ証拠なり。

（d）今、かかる実なき学問はまず次にし、もっぱら勤むべきは人間普通日用に近き（4）なり。譬えば、いろは四十七文字を習い、手紙の文言、帳合いの仕方、算盤の稽古、天秤の取扱い等を心得、なおまた進んで学ぶべき箇条ははなはだ多し。地理学とは日本国中はもちろん世界万国の風土道案内なり。究理学とは天地万物の性質を見て、その働きを知る学問なり。歴史とは年代記のくわしきものにて万国古今の有様を詮索する書物なり。経済学とは一身一家の世帯より天下の世帯を説きたるものなり。修身学とは身の行ないを修め、人に交わり、この世を渡るべき天然の（5）を述べたるものなり。

これらの学問をするに、いずれも西洋の翻訳書を取り調べ、たいていのことは日本の仮名にて用を便じ、あるいは年少にして文才ある者へは横文字をも読ませ、一科一学も実事を押え、その事につきその物に従い、近く物事の道理を求めて今日の用を達すべきなり。右は人間普通の実学にて、人たる者は貴賤上下の区別なく、みなことごとくたしなむべき心得なれば、この心得ありて後に、士農工商おのおのその分を尽くし、銘々の家業を営み、身も独立し、家も独立し、天下国家も独立すべきなり。

第一問 「 X 」に入る文章を、次の語句を並べかえることで答えなさい。

これを 与えず その人の 富貴を して、
与うる 天は 働きに ものなり 人に

第二問 次の文は「 ㄱ 」のどこに入るのか、直後の五字（記号等を含む）を抜き出しなさい。

古来、漢学者に世帯持ちの上手なる者も少なく、和歌をよくして商売に巧者なる町人もまれなり。

第三問 ——線部①とありますが、その理由を二十字以内で答えなさい。（句読点を含む）

第四問 (a) (b) (c) (d) には一箇所を除いて「されば」が入ります。「されば」が入らないものを一つ選んで記号で答え、正しい接続語を次のア～エの中から選びなさい。

ア されども イ あるいは ウ かくて エ しからば

第五問 (1) (5) に入る言葉を、次のア～コの中から選び、それぞれ記号で答えなさい。

- | | | | | | | | | | |
|---|----|---|----|---|----|---|----|---|----|
| ア | 調法 | イ | 虚学 | ウ | 趣意 | エ | 美学 | オ | 見識 |
| カ | 道理 | キ | 富貴 | ク | 貴賤 | ケ | 真実 | コ | 実学 |

第六問 問題文の趣旨を四十字以内でまとめなさい。(句読点を含む)

《問題Ⅴ》 論理的な文章とは、不特定多数の読者に向けて、自分の主張をなるべく誤解のないように筋道を立て、しか

も、正確に伝えようとしたものです。自分が思っていることを、すべての読者が同じように思っているとは限らないので、自分の主張に対しては論証責任が生じます。

以上を頭に置いて、①～⑩の言葉を使って、「集団的自衛権」について、賛成の意見と反対の意見を、それぞれ句読点を含めて百五十文字以上、二百字以内で論じなさい。

【使用する言葉】 賛成の意見と反対の意見、それぞれ四個以上使用すること

- | | | | | |
|--------|------|------|---------|--------|
| ① 合憲 | ② 違憲 | ③ 憲法 | ④ 生命と財産 | ⑤ 防衛 |
| ⑥ 国際情勢 | ⑦ テロ | ⑧ 平和 | ⑨ 自衛隊 | ⑩ 後方支援 |

(本検定はあくまで論理力を試すものであって、特定の主張を支持するものではありません。様々な重要な問題に対して、両方の立場を理解、整理し、自分で考えることの第一歩とします。)